

文章の書き方を考える

旬刊で配信される「ウェブアフガン」の読者欄へ私は定期的に投稿している。多い時は月3回の時もある。本サイトの読者の中には、「なぜこの人はこんなに熱心に投稿しているのか」と思う人もいるかもしれない。実際、編集発行人の野口壽一さんもそう思っている一人のようなので、私が文章を書くようになった経緯を纏めることにした。私は文章を書くことが好きだ。それはたぶん、大学時代に英字新聞部に所属していたことが関係しているのではないかと思う。私は高校まではかなり引っ込み思案で人見知りをするタイプだった。そんな自分を少しでも変えたいと思って、大学に入るとすぐに英字新聞のクラブに入った。英語が好きだったこともあるが、何よりも新聞は記事の取材や広告とりで人と接触しなければならない。こうした環境に自分を置けば、引っ込み思案な性格を少しは変えられるのではないかと考えた。英語のチェックや編集に協力してくれたのは、英字新聞・アサヒ・イブニング・ニュース紙に勤める50年配の編集者だった。中島さんと言ったが、彼からは文章の組み立て方や論理の展開の仕方などを徹底して教え込まれた。私は大学3年の時に編集長を務めたが、部員の原稿を持って彼に見てもらうときには非常に緊張した。文法の乱れや、誤字脱字のある原稿はその場で突き返されるため、初歩的な誤りはすべて事前に上級生がチェックした。この経験が、文章を書く上で大きな力となった。それ以来、文章を書くことが私の趣味となり、しばらく書かないでいると、何か物足りなさを感じ落ち着かなくなる。学生時代から数えると50年以上も書き続けてきているから「文章オタク」と言ってもいいかもしれない。私は世の中の出来事に非常に興味を持っている。そんなことから、私は日々のニュースの中で特に興味を持った出来事を取り上げ、それに自分のコメントを付けて「諺・格言・慣用句を借りて時世を読む」という文集を作っている。年間で500ページにもなるから我ながら驚くことがある。それともう一つ、ひとの生き方や考え方に強い関心を思っているから、ひとの言葉を集めて「折々のことば」と題する文集も作っている。今年で27年目になる。能書きが長くなったが、それでは、文章に関する私の「考え」を気の赴くままにまとめてみることにする。

◇新聞記事の書き方

これは記事を書かない人には関係がないように思われるが、新聞の読者にも役に立つところがあると思うので紹介する。私が英字新聞部に入った時に最初に渡されたのが、この記事の書き方について書かれた手引書である。時事通信と共同通信の両方に勤めロンドンに長年駐在していた先輩がまとめたものである。貰った当時は、記事一つ書くのにこんな厳しいルールがあるのかと驚いた。これを習得するように言われたが、これは

「プロ仕様」のものだろうと思っていたこともあり、なかなか身につかなかった。それでは、どんな内容か下記に紹介する。

和英両文共通

① 先ず記事の「見出し」を考える

自分が書こうとするテーマを決めたら、それについて何を読者に伝えるかを考える。伝えたい内容がメッセージであり、そこから見出しを決める。メッセージは簡潔に。記事の書き出しから、こまかな要素をすべて詰め込もうとしない。記事の最初の部分をリード (lead) と呼ぶ。この部分に労力の半分を使うくらいのつもりで書き始める。とくに英文記事ではleadに不可欠な要素として “5W、1H” (Who, What, When, Where, Why, Howの略称) がある。ただし、すべてを最初の文章に詰め込むと長くなるので、残った要素は2番目以降の文章に分散する。最初の文章は長くても30語 (words) を超えないようにする。

② 書き始めたら

事実の確認に細心の注意を払う。事実関係に誤りがないか、一人合点や勘違いがないか、記事の前後に食い違い (矛盾) がないか十分確かめる。正確さが文章の生命だ。記事の一部に誤りがあったとする。それに気づいた読者は記事全体の信ぴょう性を疑い、続けて読む意欲を失ってしまう。記述内容の重複を避ける。同じことを繰り返すと記事がくどくなる。くどい記事は読者を退屈にさせる。

③ 「逆三角形」

記事は「逆三角形」が良い。集めた情報を重要度の順に書き進める。長すぎる場合、末尾から削除できる記事が理想的。例えば、ある出来事に因果要因が7つあるとする。すべてを挙げると長くなるなら、重要度の順に4つを選ぶといったたぐい。

④ 主観的な記述を避ける

いわゆる「論説=Editorial」(一般紙の社説にあたる) などでは、主観的な意見、主張は許される。だが、一般的な記事では個人的な意見、自己主張は極力避ける。したがって、一人称 (I, We) は使わない。主観を前面に出さないためだ。主観でなく事実に語らせるよう心掛ける。意見、主張を記事に入れたければ、第三者に語らせる。

⑤ 「名数」のチェック

「名数=proper nouns, numbers」とは「固有名詞」と「数字」を指す。一般メディア業界で、記事の訂正が最も多いのは「名数」である (平均すると全体の60%前後)。人名 (組織名)、数字に誤りがないよう、特段の注意を払う。短い記事に固有名詞、

数字の間違いが含まれていたら、読者は記事全体の信ぴょう性を疑うだろう。この点
は誤字 (misspelling) についても同じ。

⑥ ニュース性

一般的に、記事には「ニュース要素」が求められる。読者の大半がすでに承知している内容を多く含む記事は興味を引かない。我々の記事は日刊新聞のようにニュース主体ではないが、それでも読者にあまり知られていない要素をなるべく多く入れるよう心がける。

⑦ 読者は誰か？

書く前に、我々の読者は誰なのか考えてみる。大学の新聞だから主な読者（ターゲット=target）は自校の学生だが、ほかにも対象を広げて考える必要がある。教授、職員を含む大学関係者、英字新聞を持つ他大学（慶応、早稲田、同志社など）の学生、英語、日本語を理解する外国人学生などがターゲットになりうる。読者層を意識することは、何を書くかテーマを絞るとき大事な要素の一つになる。

英文記事について

① 英文を書く

「良い英文を書くにはどうすればいいか？」よく聞かれる質問だが、簡潔な答えなどない。英語はコミュニケーションのtoolだから、そのtoolをより上手に使えるようにするしかない。英語を長年学んでも、それをtoolとして使いこなせないとき、どうすればいいのだろうか。まず「真似」からスタートすることを勧める。英字紙や通信社の記事を読み、応用できる文章（表現）をみつけたら、ためらわずに真似をする。幼児が言葉を覚えるとき、周囲の人たちが話す言葉の真似から始まることを改めて思い起そう。実際に英文を書くときは、上記の注意点を共通事項として念頭に置く。

② 守るべきルール

どの新聞社、通信社にも守るべき事項をまとめた「ルール集=stylebook」がある。ところが我々の新聞にこれがないため、各自が自己流のルールで書いているのが実情だ。これまで所属部員が書いた記事をチェックしてきて気づいた事項を以下にまとめてみた。最低限の共通ルールとして守ってほしい。

③ 英語、米語

使用言語は米語とする。colour, favour, modernise などの英国式綴りは使わない。

④ 文章をタイプするとき

(1) 見出し(headline)、本文(text)とも左端に揃えて打つ

(2) 本文は各パラグラフの冒頭にスペースを2回打つ

(例)

Jellyfish Revives Aquarium in Yamagata (見出し)

On April 18 this year, 300 million yen worth of bonds were issued by Tsuruoka
City..... (本文)

(3) 見出し、本文とも同じフォント、ポイント(活字の種類、大きさ)を使う。見出しだけフォントを変えたり、大きな活字を使ったりしているケースが多くみられるが、これは止めること。記者が書く記事は「素材」にすぎない。見出しを大きな活字にするか、位置を中央に動かすかなどは、編集長が最終チェックを終えた完成原稿をサイトにアップロード(もしくは紙に印刷)するとき調整する。

(4) 記事、見出しとも「半角英数」だけでタイプする。文中に「全角英数」を混入させない。

(例) There are three reasons: (1)...., (2)....and (3)...

を There are three reasons: (1)。。。、(2)。。。と全角で打たない。この方式だと、行間が広がりすぎる。

(5) フォーマット

長文の記事の場合、パソコン画面上で左右2ページに分けない。

(例) ここでは具体例を表示できないが、左右2ページに分けてタイプするとチェック作業がしにくくなるので、ぜひ守ってほしい。

(6) 記事の左右を揃える。

(正しいフォーマット)

Japanese Businesses Challenge “Halal” Market (見出し)

The “Islamic market” is one of topics often taken up in the media these days. The Japan Times takes a look at efforts being made by Japanese businesses to penetrate this fast growing “halal” market. At present, about 1.6 billion Muslims live in the world. The U.S. Pew Research Center estimates the Muslim population in 2030 at 2.2 billion, accounting for 26.4% of the world population. This suggests that the halal market will keep expanding throughout the world in the future.

(避けるべきフォーマット = 乱杭菌)

Japanese Businesses Challenge “Halal” Market (見出し)

The “Islamic market” is one of topics often taken up in the media these days. The Japan Times takes a look at efforts being made by Japanese businesses to penetrate this fast growing “halal” market. At present, about 1.6 billion Muslims live in the world. The U.S. Pew Research Center estimates the Muslim population in 2030 at 2.2 billion, accounting for 26.4% of the world population. This suggests that the halal market will keep expanding throughout the world in the future.

(7) 固有名詞、数字

「名数」について和英両文共通項で述べたこと以外に英文では以下のルールを守ること。

(固有名詞)

7-1：人名、組織名は原則としてフルネームを使う。人名は初出で first name を省かないこと。2 度目の記述以降は family name だけでよい。

7-2：人名については「肩書き」も正確に。人名と肩書きの書き方は以下を参照。

Yoshihide Suga, prime minister of Japan, (prime minister は小文字)

Japanese Prime Minister Yoshihide Suga (すべて大文字)

(敬称)

Mr., Mrs., Miss, Ms., Prof., Dr.などの敬称は原則として使わない。

人名には最初に触れるとき肩書きをつけるか、どういう人物かの簡単な説明をする。二度目以降の記述では敬称を付けず “family name” だけとする。

(例)

Ms. Yuka Uesugi, a Law Faculty second grader, (この場合のMs.は女子学生であることを一目で示すための例外として認める)。2度目以降の記述では、単にUesugi said...とする。

Shinzo Abe, former prime minister of Japan の場合、2度目以降は単にAbe said...とする。

(会社などの組織名)

Kewpie Corp. Ajinomoto Co. (正式にはCorporation, Co., Ltd.だが、Corp., Co.を使い、Ltd.は省いてよい。ただし、Hitachi, Ltd.のような社名ではLtd.を省かない。説明をつけるときは、人名の肩書きをつけるときと同じに考えればよい。

(例)

Major Japanese food manufacturer Ajinomoto Co.

Ajinomoto Co., a major Japanese food producer,

上の記述には不定冠詞がつかず、下の記述には不定冠詞がついている点に注意。

(数字)

普通の数字について

1から9までは one, two...nineとspell outする。10以上は数字を使う。大きな数字は3ケタごとにコンマを入れる。英語には日本語で使う10万を表す単語がないので百万以下の数は数字で表示する。百万以上は million, billion, trillionを使う。

(例) 123万は 1.23 million 24億5千万は 2.45 billion

このルールは順位を表す数字にも適用する。first, second... 10th... 100th (1st, 2nd としない) .

(8) 引用について

記事には人物が述べた「引用」(quote)が付きものである。英文記事では引用が不可欠な要素である。引用のないインタビュー記事は「欠陥商品」とさえ言える。「引用」は和文と英文とではルールの厳しさが明らかに異なる。簡単にいえば、和文では比較的ゆるやかだが、英文では本人が実際に話した言葉以外は認められないほどルールが厳格である。便宜上、引用する人物を英語の native

speakerと、そうでない場合に分けて考える。Native speakerの引用は忠実に。例えば、英国人や米国人の話した内容が和訳されている場合、その和訳をベースに英訳するのは絶対に避けなければならない。どうしても原語が見つからないときは、間接話法を用いる。Native speakerでない場合、例えば原語が日本語、国語、フランス語など、和訳をベースに英訳するのは許される。

(9) News source、attribution について

この二つはいわゆる「ネタ元」に当たり、英文では和文以上に重要とされ、不可欠な要素だ。上述の「主観的な記事」を避けるためには、記述内容を誰が述べたのか（出典）を明確にする必要がある。見解の相違がないような「真実、事実」にまでは当てはまらないが、異論がありうる記述では、この原則を守ること。

(例) # Taro is a racist (不可) .

Hanako said (claimed) Taro is a racist (可) .

All Taro says and does suggest that he is a racist (許容範囲内)

The average life span of Japanese women is 87.47 years (疑問あり) .

The average life span of Japanese women is 87.47 years, according to the Ministry of Health, Labor and Welfare (疑問なし)

以上がその内容である。我々が日々読んでいる新聞記事は、プロによってこれよりもはるかに厳しい「決まりごと」で書かれている。それを知るだけでも、読者は新聞をより身近に感じられるようになるに違いない。

◇読んでもらえる文章をいかに書くか

上記は記事の書き方についての指針だが、次は個人的な考えを織り交ぜた文章（コラム、エッセイなど）を書くための心構えについて触れることにする。文章を書いたからと言っても読んでもらえなければ意味がない。読んでもらえる文章を書くにはどうしたらいいか、私なりの考えを簡単にまとめた。

- ① 一番大切なことは、やはり本や新聞、雑誌など、色々なものを読む習慣を身につけることである。要は「読み慣れる」ことで、文章の「良し・悪し」を判断できる知識を持つことが基本になる。これは、一朝一夕で出来ることではないので、絶えず心掛けることが必要だ。料理が上達するには、いろいろな料理を食べて「舌」を肥えさせることが一番だと言われるが、それと同じことである。

- ② 「書き慣れる」ことが文章上達の近道である。これは、上記の「読み慣れる」ことと対をなす考え方で、「読んでは書き」「書いては読む」の繰り返しは非常に効果がある。例えば、日記を付けることも役立つ。大げさに考えず、その日の出来事を数行に纏めるといい。「書き慣れる」ためにはいい訓練になる。
- ③ 自分独自の視点を持つこと。平凡なものの方で書かれた文章が人の関心を引くことはない。人と違った観点で書かれたものは、少々文章に問題があっても読んでもらえる。例えば、「生きるとは、布団から起き上がる時の決意である」という文章を読んだとしたらどうだろうか。「生きる」という大事（おおごと）を「布団から起き上がる」という日常の行動と結びつける発想は面白いと思わないだろうか。こうした視点を育てるには作家の書いたエッセイを読むのが最適だ。文章も一編一遍が短いので気軽に読める。エッセイは独特の視点で書かれているので、目の付け所がわかり大変参考になる。向田邦子のエッセイや星新一の「ショートショート」などはお勧めだ。
- ④ 本や新聞、雑誌などを読んだものの中で、これだと思う言葉やフレーズ、諺・格言・慣用句などを書き留めておく。また、見たこと、聞いたこと、感じたこと、経験したことなども短くリストしておけば応用が利く。我々素人の書いたものはインパクトが小さいので、文章の中で自分の主張を補強するために、こうしたものからの引用は文章を魅力あるものにする。
- ⑤ 日常の出来事の中で、不思議に思ったことや面白いと思ったことを拾い集めておく。例えば、最近のニュースで鉄製の電信柱が散歩する犬の尿で倒壊したと報じられた。寿命が50年のものが20年で倒れたと言うから、私にはとても不思議に思えた。こうした類いの話をメモしておく。要するに、「犬が人間を咬んでも」ニュースにならないが、「人間が犬を咬めば」ニュースになる類いの出来事なので、読んで楽しいし、書くテーマにもなる。
- ⑥ 文章にはちょっとしたユーモアが必要である。私は落語が好きなので、その話の中から面白い言葉を拾って書き留めたりする。例えば、「あくびをしながら物を咬めとは無茶な」、「ケチな人は1〜5まで指を折って数えるが、6以上数える時には握った指を開かなければならないので数えない」、「ウナギ屋の前に住む親父がその匂いで毎日飯を食べるのを知って、ウナギ屋の主人が金を払えと催促に行くと、その親父は竹筒に入れた金貨の音を聞かせるだけで金を払わなかった」など実に面白い。落語の「噺」の中にはこうした類いの話がたくさん出てくる。こうしたユーモア精神は書く上で効果がある。その気になれば趣味も役立つということである。

- ⑦ 英文を書くと言っても、基礎はやはり日本語である。我々にとって英語は後天的に覚えた言語だから、日本語を介してしか書けない。私たちの頭は「英語仕様」にはなっていない。だから、日本語を訓練する必要がある。日本語以上に上手な英語は書けない。その意味で、日本語の上達が英文を書く上で基本の「キ」になる。

以上が、文章を書く時に私が心掛けていることである。まとまったものを書くことは容易なことではない。絶えず世の中の出来事を観察し、それを理解・咀嚼して、自分の言葉で表現する訓練をしなければならない。それには、自分の感性と知識を総動員する必要がある。

◇魅力ある文章をいかに書くか

魅力ある文章を書くには、「気配り」と「心構え」がどうしても欠かせない。われわれは読みたくて読んでくれる人を相手にしているわけではない。多くは読む義務のない人に読んでもらうわけだから、書き手は「最善の努力」の結果を提供しなければならない。読者は気まぐれだから、いろいろと配慮が必要だ。どんなテーマを取り上げ、どのように文章を組み立て、レイアウトはどうするか、活字は何にするか、どこで文章を切って段落をつけるか等々、読みやすくして少しでも先まで読んでもらうための工夫をあれこれとしなければならない。こうした気配りをしなければ、ひとは最後まで読んでくれない。他人の時間を使わせていることを忘れてはいけない。それが誤字脱字だらけ、使う活字はバラバラ、レイアウトにも配慮が感じられない文章など、誰も読んでほくれない。そんな文章は、自分の未熟さをわざわざ曝け出して、読んでもらえないように仕向けているようなものだ。

「文は人なり」と言う。文章には知らず知らずのうちに人柄が現れる。真面目な人なのか、いい加減な人か、無神経な人か、几帳面な人かなど、文面から一目瞭然に読み取れる。その意味で、文章はいい加減には書けない。お喋りと違って、書いたものは出版されてしまった後からでは取り返しがつかない。一生記録されたまま残り、「恥じ」も道連れとなる。そこで、私は文章を書く時には次の7つの原則を守っている。

1. 物事をいろいろな角度から見る。
2. タイトルに細心の注意を払う。
3. 文章にリズムを持たせる。
4. センテンスはできるだけ短くまとめる。
5. 言葉の語感を大切に作る。
6. 語彙を充実させる。
7. ユーモアを織り交ぜる。

この中で私が特に重視しているのは、「リズム」と「タイトル」、「ユーモア」の3点である。私は文章にはリズムがとても大事だと思っている。音楽と同じで、リズムがいいと文章が頭

に入りやすく、読みやすくなる。リズムのあるなしは音読すればすぐ分かる。作家の村上春樹氏も「僕は文章の書き方を音楽から学びました。いちばん何が大事かというと、リズムです。文章にリズムがないと誰も読みません」と言っている。またタイトルを付ける時は、どうしたら読者に興味を持ってもらえるか、十分に時間を掛けて考えるようにしている。というのは、その良し悪しでひとに読んでもらえるかどうか、決まると思っているからだ。最後に上げたユーモアは、文章の隠し味としての役割を果たす。文章に明るいアクセントを与える。

私の好きな作家に井上ひさしがいる。彼の文章は分かりやすくユーモアに富んでいる。それは、彼の文章論「難しいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことを愉快地に、愉快的なことをまじめに書く」が根底にあるからだと思う。私はものを書く時は、いつもこの教えを参考にしている。「難しいことをやさしく」書くことは簡単なことではない。こういった趣旨で書かれているものに、小中高生向けのサイエンス関連の本がある。宇宙、動物、宗教、医学、哲学などのテーマで、その道の専門家が噛み砕いて子供相手に解説している。難しく書けばいくらでも難しく書ける分野だが、やさしく書かれているので、これなら科学に疎い私にも理解できる。こうした簡潔に書かれた子供向けの本は、読むだけでなく文章を書く上でも大変に参考になる。英字新聞の主役は英語である。だからと言って、英語だけを勉強すればいいということではない、基本は日本語である。我々日本人にとって、英語は後天的な言語だから、初めに日本語で思考し、その後で英語に置き換える。実際は「日本語ファースト」なのである。だから、日本語の能力以上に英語が上達するということなどはありえない。言い換えれば、英語力の向上のためには日本語力の強化が必要不可欠だということになる。日本語で書こうが、英語で書こうが、文章を書く心構えは同じだ。文章の世界は奥が深い。そんな世界で、これからも文章力の向上を目指して取り組んでいきたいと思っている。